

図 3-10 宝満座主跡測量図

江戸前期の段階において東院谷には平石坊(座主)、南ノ坊、福泉坊、浄徳坊、浄住坊、浄善坊、道場坊、大正坊、中谷坊、修蔵坊、鳥居坊、財行坊、尾崎坊、井本坊、松林坊、福定坊の座主ほか 15 坊があり、坊はその後多少変遷して江戸後期まで営まれた(『宝満山絵図東図』)。

一方で、本地区でも近年の集



写真 3-18 東院谷の石垣

中豪雨や地震などで多数の土砂崩れが発生している。登山者の増加による登山道の変形が雨水経路を変え、集中豪雨に雨水が大量に坊跡に流入して土砂災害を引き起こしている。また、登山者が高齢化してきており、それに起因する当該域での遭難発生事案も多い。



写真 3-19 キャンプセンター

昭和 40 年代以降は福岡都市圏近郊の山として多くの登山者が訪れるようになり、登拝道をメインルートに入山する状態が、現在も続いている。そのような中、昭和 43 年(1968)に東院谷地区の座主跡の平地を利用しプレハブの山小屋が設置され、平成元年(1989)にログハウスとしてリニューアルされ、山中で宿泊できる山となった(写真 3-19)。



写真 3-20 バイオトイレ

キャンプセンターの管理を担ったのは任意団体の西鉄山友会であり、同会は山小屋のし尿管理(荷下ろしによる廃棄)をはじめ、宝満山全域で登山者へのごみの持ち帰り運動、登山路・石段の維持管理、危険個所のロープ・足場の設置、廃仏毀釈で谷に投棄された石仏の搜索・再設置などの活動を自主的に行うようになった。平成 20 年(2008)には西日本鉄道株式会社の出資で既存のトイレを改修してバイオトイレを整備している(写真 3-20)。

f. 本谷地区

以前から「妙見祠礎石群」「本谷礎石群」の名で知られ、平成 21 年度の計画調査で、地山を削り出して造作した基壇と階段を伴う、平安時代の 3 間×3 間の礎石建物であることが確認された。平安時代の小金銅仏が出土したことから仏殿と考えられる。弘仁 9 年(818)の最澄の手になる『六所造宝塔願文 護国縁起』記載の「筑前宝塔院」や、承平 7 年(937)石清水八幡宮文書所収の大宰府牒の示す「六箇基宝塔」中の筑前龍門山の宝塔「安西塔」である説が唱えられている。

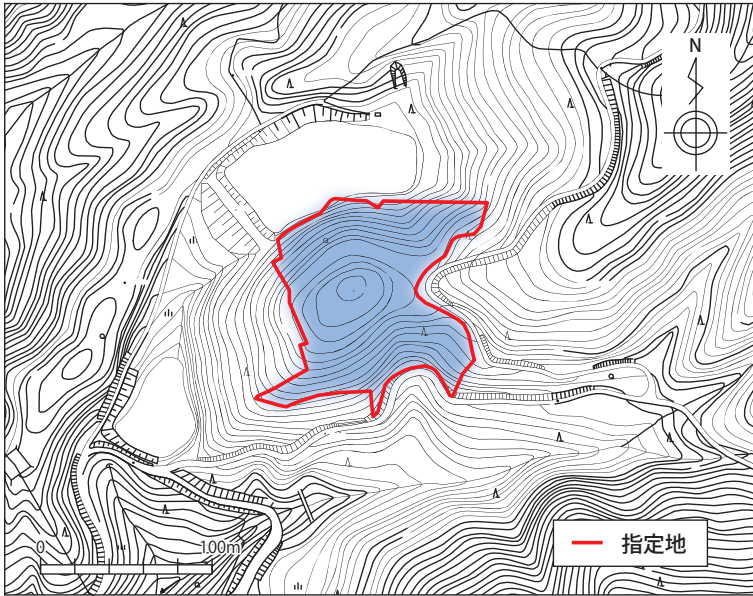


図 3-11 本谷地区位置図

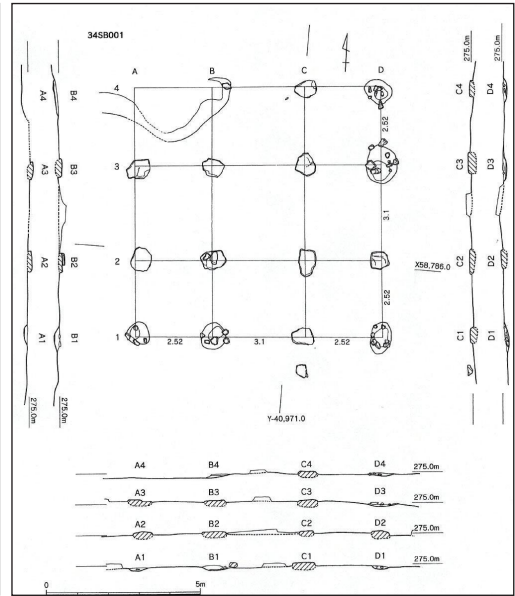


図 3-12 礎石建物遺構図 (宝満 34 次調査)



写真 3-21 礎石建物跡



写真 3-22 石造宝塔

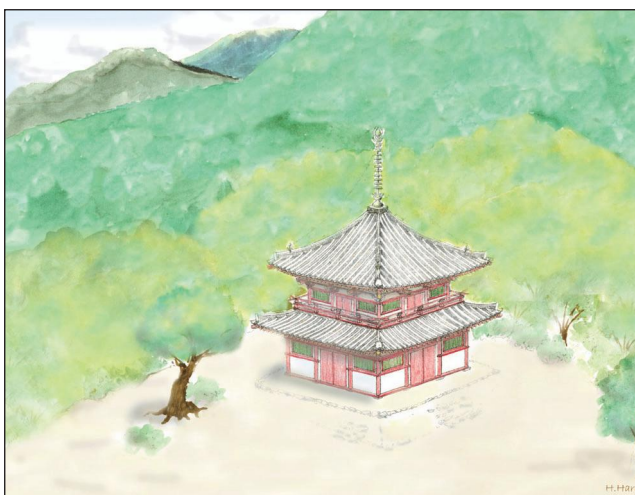


図 3-13 礎石建物イメージ図

初めはマツやクヌギなどの雑木の生える山林であったが、礎石のある箇所は発掘調査に先立って皆伐され、埋め戻された後は地元有志によってスギの木を使った遺跡の表示がなされている(写真 3-21)。礎石横の平地には天台宗により宝塔の古図を基に 1/10 の大きさで石造宝塔が置かれ、法華経を納経している(写真 3-22)。地所の林道に接する側には宝塔の説明板が二基設置されている。地所内は礎石と復元石塔のある空地とスギの植樹による山林、参道からなる。地所は天台宗のものだが日常的な清掃などは地

元内山区の地元有志が行っている。空地は林道から入り込むため登山者の用を足す場所として利用され問題化している。

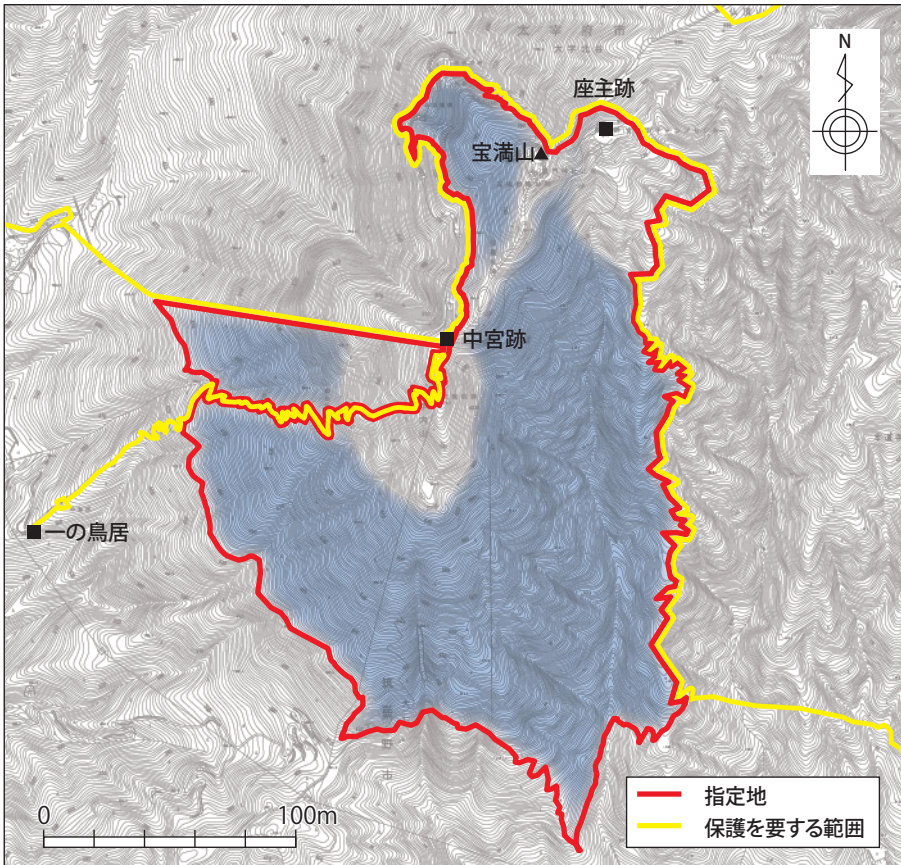


図3-14 その他の山中地区位置図

g. その他の山中地区

龍門神社が所有する山内においては、先に挙げた上宮、西院谷、東院谷地区以外にも歴史性を有す井や窟、人為的な段造成、湧水のある沢、巨岩などが広く山内に点在しており、土器や石造品等の散布だけでは把握できない遺構群が存在している。

上宮、西院谷、東院谷地区などは、江戸時代までは堂舎や坊舎があった、所謂仏地と僧地のような位置づけであり、その他の広範な山中は行場や祭祀場、営林・育林の場として利用されて

きた。修験道における山内での行場や祭祀場については「五井七窟」とよばれる湧水地と石窟(岩屋)が有名であるが、山中の行として最大の行事であった「大巡行」と呼ばれる山内を巡る回峰行の記録が参考となる。仲谷坊が残した『天保八年大巡行法』から復元されるルートは、東院谷地区の薬師堂を基点に法城窟、福城窟、益影の井、冠石、中院、大南窟を経て中宮の大講堂、行者堂(梵字石)、馬蹄岩、御本社(上宮)、仏頂山、普地窟、船石、剣窟、獅子宿、雨宝童子(元水場)を経て薬師堂に帰るというルートであった(写真3-23、24)。

途中に供華(花)、読経、遥拝を行いつつ移動するが、その場所は堂舎、窟、井、石塔、石仏、瓶(陶器の祠)の置かれた沢、巨石(石)、崖、立場とされる見晴らしのある岡や岩の頂部などであり、遥拝の対象は岩、岡、山そのものであったことが記録から見て取ることができる。山に入り地に伏



写真3-23 福城窟



写真3-24 益影の井



写真 3-25 龍門岩

す行をおこなった場として、神仏を感得することのできる神聖な自然空間こそが行場となっていた。井本坊に残された『龍門山水帳』（寛文11年(1971)以降成立)によれば、山内は神地、寺内、坊山、預山に区分され、上宮周辺のブナなどの原生林域が神地、東院、西院谷の坊域が寺内、各坊の営林域が坊山、共同管理や管理委託した領域が預山であった。山中での坊山や預山においては、それぞれでの行や祭祀がおこなわれていたものと思われ、広い山中で遺物が散見される。その中で龍門岩とよばれる龍門山の名

の由来ともいわれる三石が鼎立した岩があり、信仰上重要な岩であったが、その一石が倒れ長らく苔に埋もれた状態であったものを文化13年(1816)に再興したものである(写真3-25)。

この地区における考古学による行や祭祀の研究は遅れているが、近世文書が示す山中祭祀の世界観はそれを補うものとして、この地区の歴史性を物語っている。

信仰以外にも山頂から北の仏頂山に連なる峰周辺には龍門山城があったと想定されているが、堀切はないものの人為性を示すものとして段造成群が点在する。この稜線以外にも広い山中には段造成(平場)が点的に見られ、これらは坊域を離れた一時的な宿营地や祭祀場、行場や作業場などとして利用されたと考えられる。このほかこの地区には、生業に係るものとして段造成にからんで石組を伴う炭窯や石列などもある。

この地区は、通常では登山ルート以外は積極的に登山者が立ち入る場にはなっていないが、登山ルートに近い巨石にはハーケンが打ち込まれた箇所が見られる。反対に遺構として忘れ去られ、認知されないうちに土砂崩壊や植物の繁茂などにより形状が失われた箇所も見られる。

h. 下宮地区

江戸時代以前からの龍門神社社地であり、山頂上宮を遥拝する下宮として位置づけられていた。

明治4年(1871)に山頂を含む山中が上地されて官有(国有)地となり、明治28年(1895)に官幣小社へ昇格を機に下宮が整備されるとこの地の社が本殿とされるようになった。この地所の西に礎石が露出する下宮礎石建物跡がある。土間や向拝を持つ九州でも有数の仏殿とされ、建物は中世に廃絶したと思われるが礎石中にほぞ穴を施すものがあり、廃絶後に礎石を利用して小祠が置かれ、信仰の施設としてその後も利用されていたことが考えられる。域内は現在も神社境内として維持管理され、境内は本殿、摂末社、小祠、広場(空地)、参道(一部石置)、道路、駐車場、園地、社務所、社務所を補完する機能を持つ建物、山林などからなる(写真3-26)。平成24年度から宝満山開山1350年に合わせて整備事業が徐々に行われ、社務所と摂末社の改築、園地、参道の再整備などが進められている。園地には氏子他による初老や還暦記念にサクラやモミジの植樹が行われている。広場(空地)は桜見、護摩供、七夕等の四季の行事等で利用されることがある(写真3-27)。

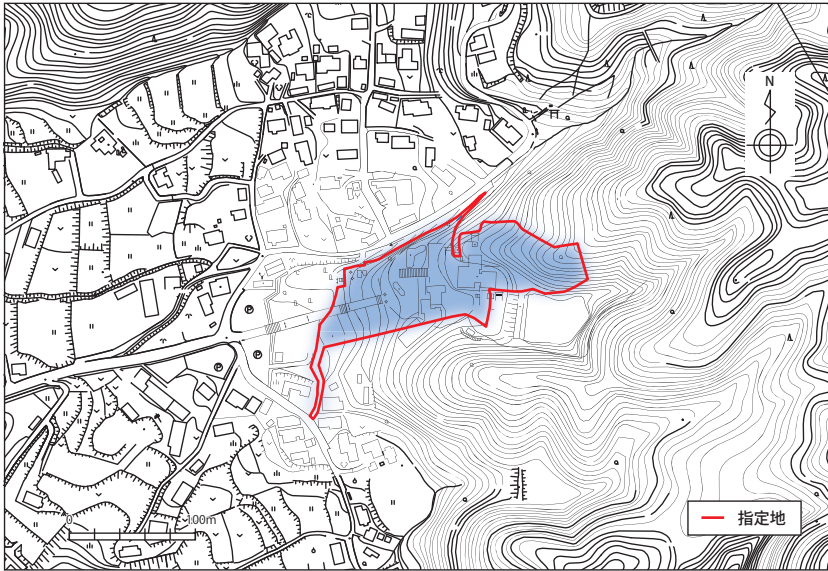


図3-15 下宮地区位置図

戦前よりヤマザクラやカエデの名所として知られ、春秋には多くの見物客が訪れていたが、近年の境内地整備の頃から縁結びにちなんでか参拝者が増え、現在年100万人近くの来訪者を数えるといい、訪日外国人も増えている。また、宝満山登山の起点としても知られ、バスや自家用車で神社まで来訪し、参拝して登山する登山者が多い。

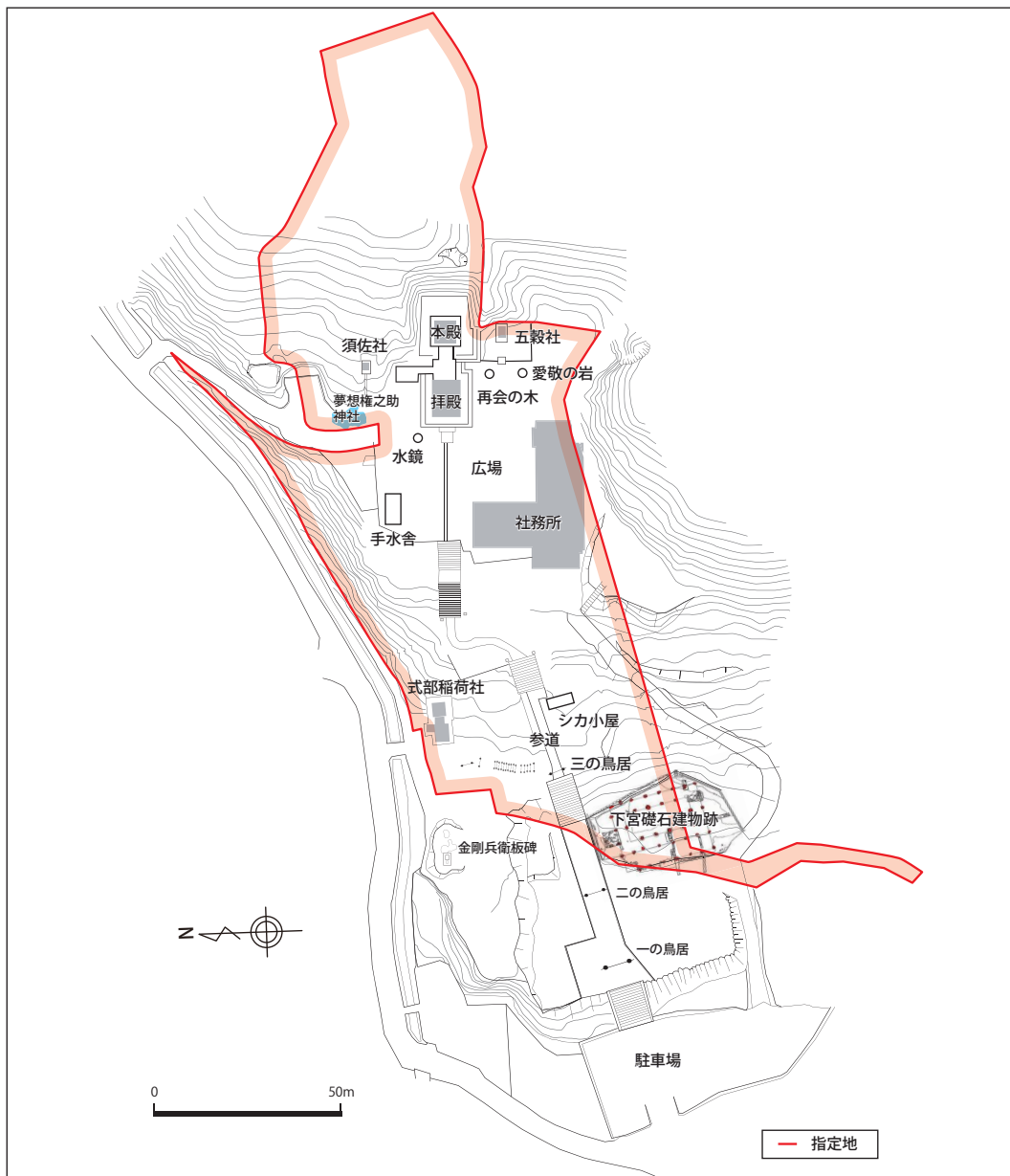


図3-16 竈門神社境内図

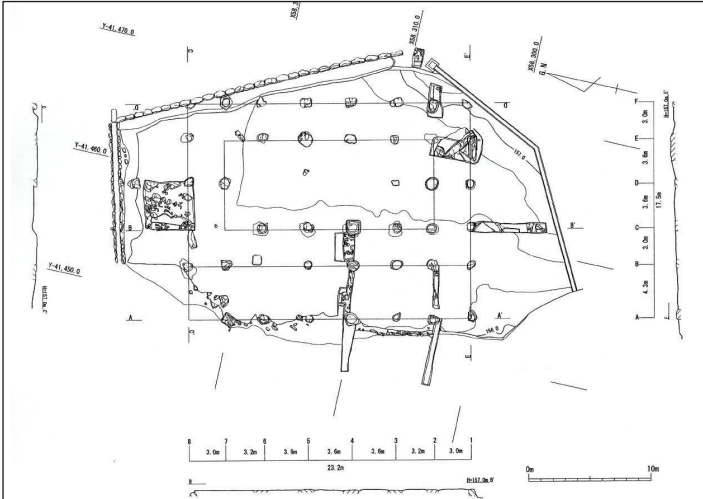


図 3-17 礎石建物遺構図 (宝満 37 次調査)



図 3-18 礎石建物イメージ図



写真 3-26 龍門神社拝殿



写真 3-27 龍門神社境内広場



写真 3-28 境内で行われる護摩供

「峰入り」は江戸時代までは山中に居住していた宝満二十五坊と呼ばれる修験道の行者が春は宗像方面、秋は英彦山まで峰伝いに行を繰り返しながら抖擻する行事であった。現在では龍門神社を発し、山頂、座主跡、仏頂山に至る日帰りコースを市民と登拝する行事として毎年行われている。「採灯大護摩供」は屋外に護摩壇を仕立てて祈禱を行う修験道の行事で、信者が願文を書いた護摩札を護摩壇に投げ入れて焼き、残り火のあるうちにそれを広げて「火渡り」を行っている。現在でも境内は神社祭祀と共に山の信仰と係る行事の場としても、利用されている(写真 3-28)。

i. 大門地区

下宮礎石建物の南西約100mの位置にあり、平成21年度の発掘調査により平安時代の仏殿と考えられる礎石建物(堂舎)が発見され、その価値が古代後期の宝満山での信仰を示す証拠の一つとして認められ史跡指定された。少なくとも近代以降は耕作地であり、ここは個人所有であり、指定後も耕地などとして管理、利用されている(写真3-29)。

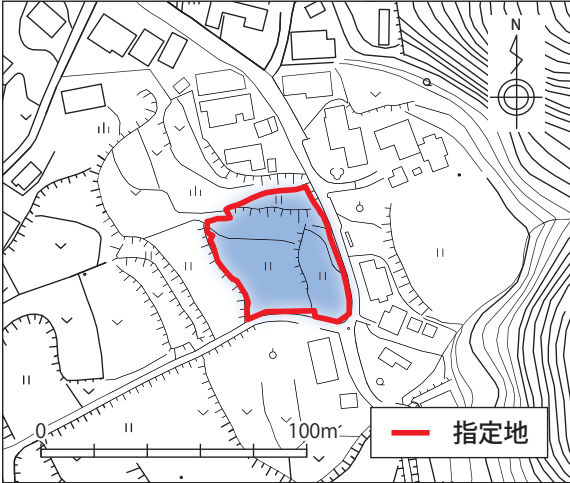


図 3-19 大門地区位置図



図 3-20 礎石建物イメージ図

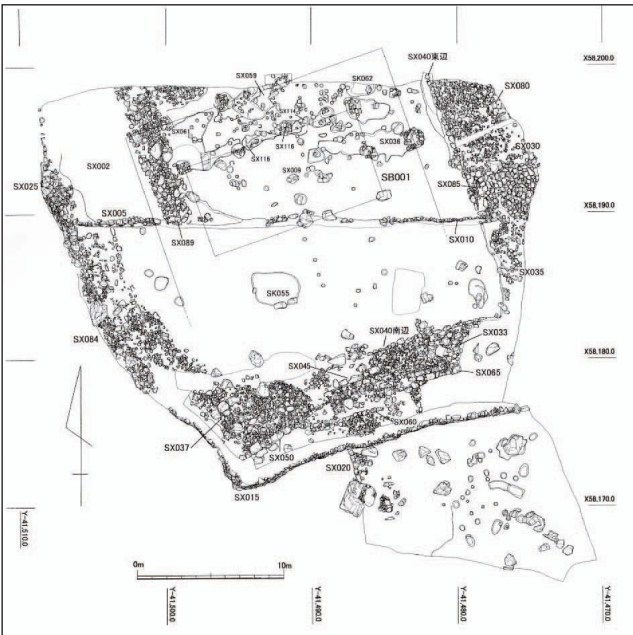


図 3-21 礎石建物遺構図(宝満42次調査)



写真 3-29 大門地区現況

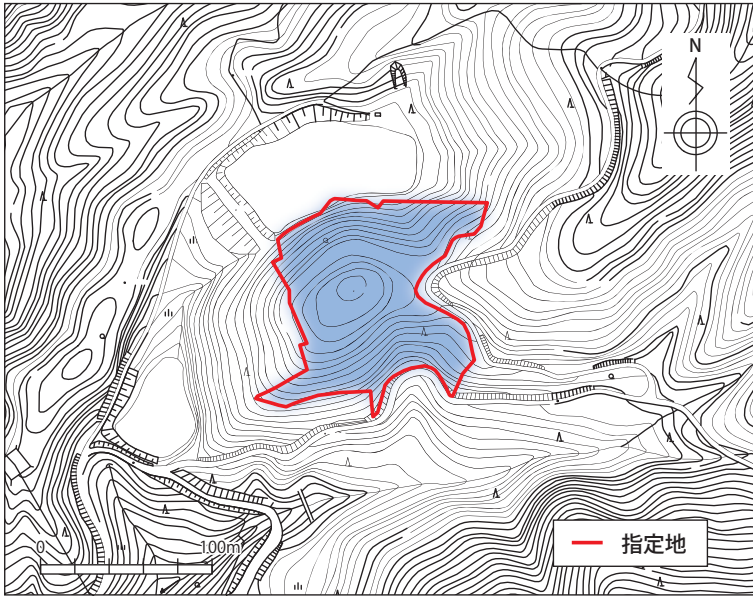


図 3-11 本谷地区位置図

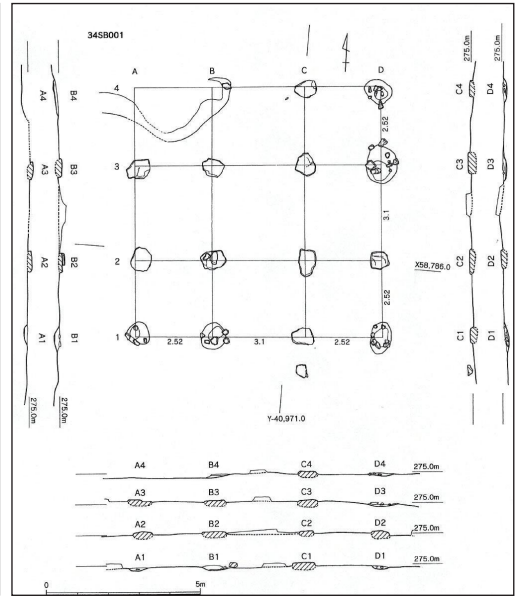


図 3-12 礎石建物遺構図 (宝満 34 次調査)



写真 3-21 礎石建物跡



写真 3-22 石造宝塔

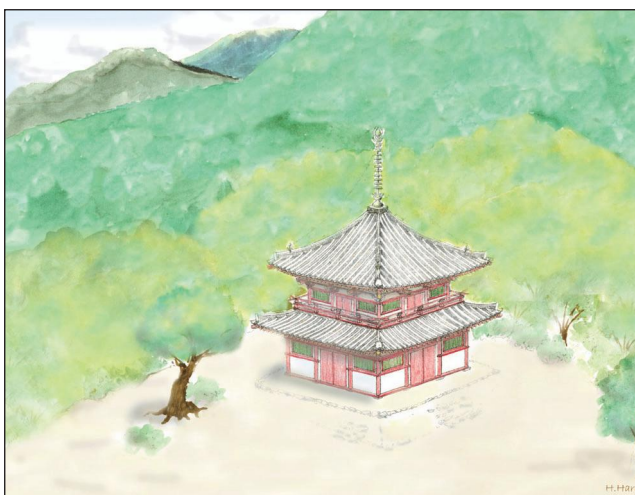


図 3-13 礎石建物イメージ図

初めはマツやクヌギなどの雑木の生える山林であったが、礎石のある箇所は発掘調査に先立って皆伐され、埋め戻された後は地元有志によってスギの木を使った遺跡の表示がなされている(写真 3-21)。礎石横の平地には天台宗により宝塔の古図を基に 1/10 の大きさで石造宝塔が置かれ、法華経を納経している(写真 3-22)。地所の林道に接する側には宝塔の説明板が二基設置されている。地所内は礎石と復元石塔のある空地とスギの植樹による山林、参道からなる。地所は天台宗のものだが日常的な清掃などは地

元内山区の地元有志が行っている。空地は林道から入り込むため登山者の用を足す場所として利用され問題化している。

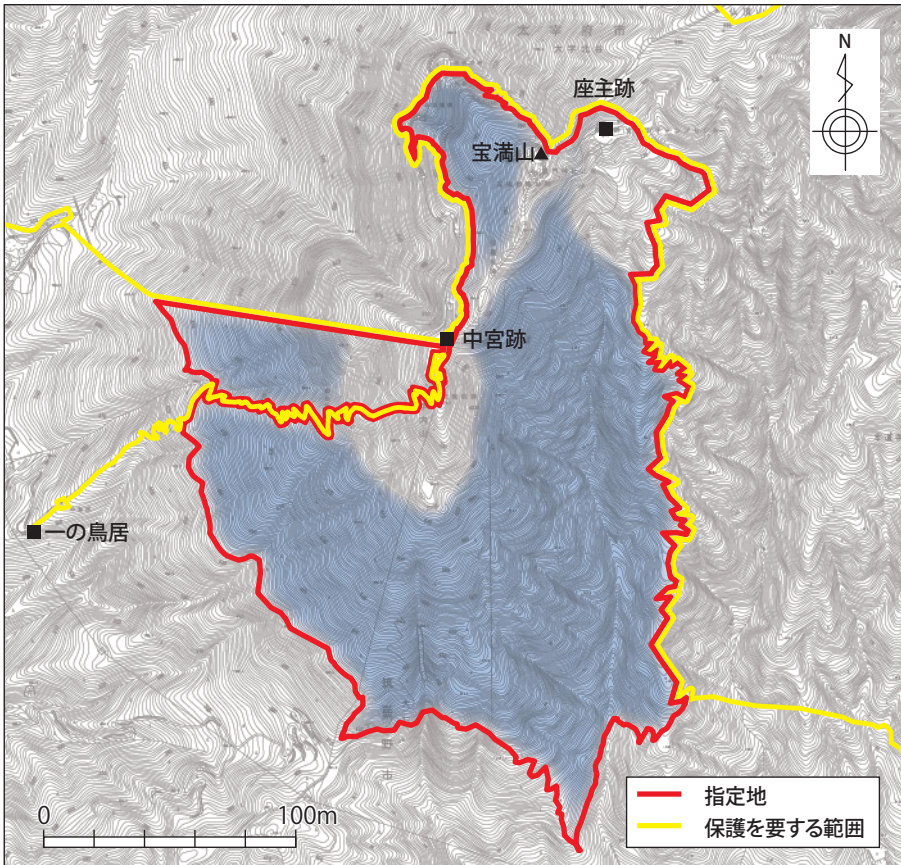


図3-14 その他の山中地区位置図

g. その他の山中地区

龍門神社が所有する山内においては、先に挙げた上宮、西院谷、東院谷地区以外にも歴史性を有す井や窟、人為的な段造成、湧水のある沢、巨岩などが広く山内に点在しており、土器や石造品等の散布だけでは把握できない遺構群が存在している。

上宮、西院谷、東院谷地区などは、江戸時代までは堂舎や坊舎があった、所謂仏地と僧地のような位置づけであり、その他の広範な山中は行場や祭祀場、営林・育林の場として利用されて

きた。修験道における山内での行場や祭祀場については「五井七窟」とよばれる湧水地と石窟(岩屋)が有名であるが、山中の行として最大の行事であった「大巡行」と呼ばれる山内を巡る回峰行の記録が参考となる。仲谷坊が残した『天保八年大巡行法』から復元されるルートは、東院谷地区の薬師堂を基点に法城窟、福城窟、益影の井、冠石、中院、大南窟を経て中宮の大講堂、行者堂(梵字石)、馬蹄岩、御本社(上宮)、仏頂山、普地窟、船石、剣窟、獅子宿、雨宝童子(元水場)を経て薬師堂に帰るというルートであった(写真3-23、24)。

途中に供華(花)、読経、遥拝を行いつつ移動するが、その場所は堂舎、窟、井、石塔、石仏、瓶(陶器の祠)の置かれた沢、巨石(石)、崖、立場とされる見晴らしのある岡や岩の頂部などであり、遥拝の対象は岩、岡、山そのものであったことが記録から見て取ることができる。山に入り地に伏



写真3-23 福城窟



写真3-24 益影の井



写真 3-25 竈門岩

す行をおこなった場として、神仏を感得することのできる神聖な自然空間こそが行場となっていた。井本坊に残された『竈門山水帳』（寛文11年(1971)以降成立)によれば、山内は神地、寺内、坊山、預山に区分され、上宮周辺のブナなどの原生林域が神地、東院、西院谷の坊域が寺内、各坊の営林域が坊山、共同管理や管理委託した領域が預山であった。山中での坊山や預山においては、それぞれでの行や祭祀がおこなわれていたものと思われ、広い山中で遺物が散見される。その中で竈門岩とよばれる竈門山の名

の由来ともいわれる三石が鼎立した岩があり、信仰上重要な岩であったが、その一石が倒れ長らく苔に埋もれた状態であったものを文化13年(1816)に再興したものである(写真3-25)。

この地区における考古学による行や祭祀の研究は遅れているが、近世文書が示す山中祭祀の世界観はそれを補うものとして、この地区の歴史性を物語っている。

信仰以外にも山頂から北の仏頂山に連なる峰周辺には竈門山城があったと想定されているが、堀切はないものの人為性を示すものとして段造成群が点在する。この稜線以外にも広い山中には段造成(平場)が点的に見られ、これらは坊域を離れた一時的な宿营地や祭祀場、行場や作業場などとして利用されたと考えられる。このほかこの地区には、生業に係るものとして段造成にからんで石組を伴う炭窯や石列などもある。

この地区は、通常では登山ルート以外は積極的に登山者が立ち入る場にはなっていないが、登山ルートに近い巨石にはハーケンが打ち込まれた箇所が見られる。反対に遺構として忘れ去られ、認知されないうちに土砂崩壊や植物の繁茂などにより形状が失われた箇所も見られる。

h. 下宮地区

江戸時代以前からの竈門神社社地であり、山頂上宮を遥拝する下宮として位置づけられていた。

明治4年(1871)に山頂を含む山中が上地されて官有(国有)地となり、明治28年(1895)に官幣小社へ昇格を機に下宮が整備されるとこの地の社が本殿とされるようになった。この地所の西に礎石が露出する下宮礎石建物跡がある。土間や向拝を持つ九州でも有数の仏殿とされ、建物は中世に廃絶したと思われるが礎石中にほぞ穴を施すものがあり、廃絶後に礎石を利用して小祠が置かれ、信仰の施設としてその後も利用されていたことが考えられる。域内は現在も神社境内として維持管理され、境内は本殿、摂末社、小祠、広場(空地)、参道(一部石置)、道路、駐車場、園地、社務所、社務所を補完する機能を持つ建物、山林などからなる(写真3-26)。平成24年度から宝満山開山1350年に合わせて整備事業が徐々に行われ、社務所と摂末社の改築、園地、参道の再整備などが進められている。園地には氏子他による初老や還暦記念にサクラやモミジの植樹が行われている。広場(空地)は桜見、護摩供、七夕等の四季の行事等で利用されることがある(写真3-27)。

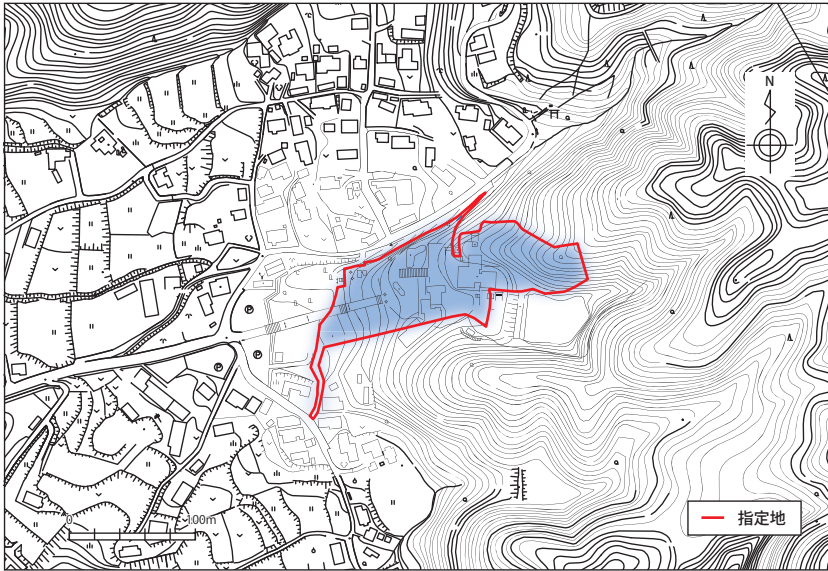


図3-15 下宮地区位置図

戦前よりヤマザクラやカエデの名所として知られ、春秋には多くの見物客が訪れていたが、近年の境内地整備の頃から縁結びにちなんでか参拝者が増え、現在年100万人近くの来訪者を数えるといい、訪日外国人も増えている。また、宝満山登山の起点としても知られ、バスや自家用車で神社まで来訪し、参拝して登山する登山者が多い。

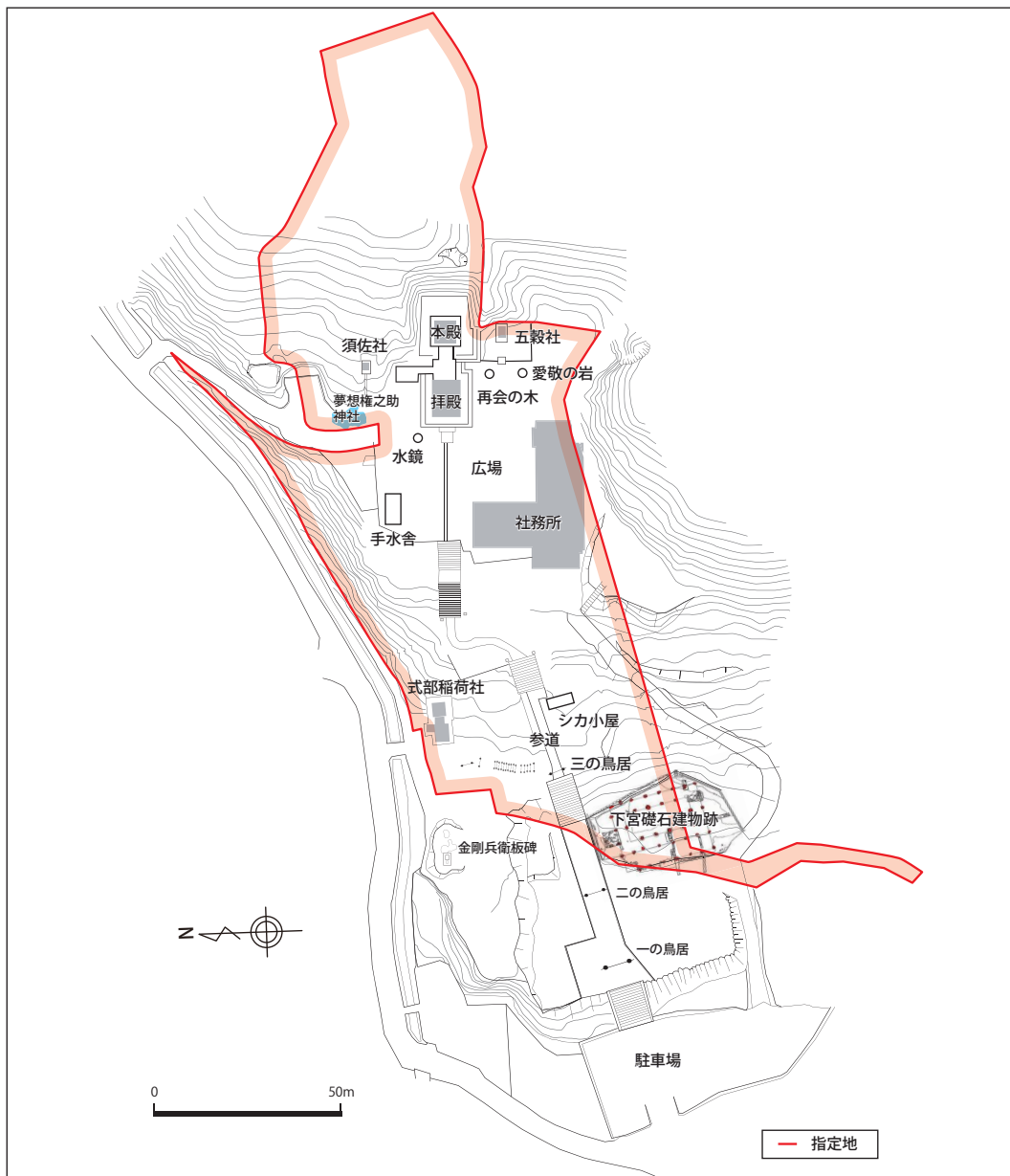


図3-16 竈門神社境内図

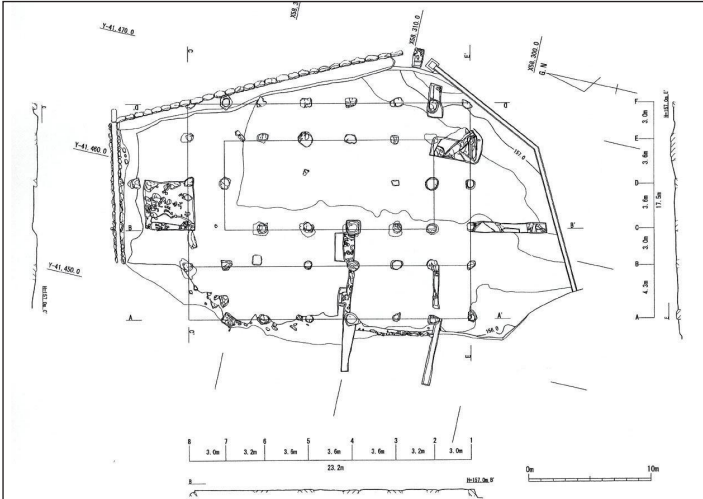


図 3-17 礎石建物遺構図 (宝満 37 次調査)



図 3-18 礎石建物イメージ図



写真 3-26 龍門神社拝殿



写真 3-27 龍門神社境内広場



写真 3-28 境内で行われる護摩供

「峰入り」は江戸時代までは山中に居住していた宝満二十五坊と呼ばれる修験道の行者が春は宗像方面、秋は英彦山まで峰伝いに行を繰り返しながら抖擻する行事であった。現在では龍門神社を発し、山頂、座主跡、仏頂山に至る日帰りコースを市民と登拝する行事として毎年行われている。「採灯大護摩供」は屋外に護摩壇を仕立てて祈禱を行う修験道の行事で、信者が願文を書いた護摩札を護摩壇に投げ入れて焼き、残り火のあ

るうちにそれを広げて「火渡り」を行っている。現在でも境内は神社祭祀と共に山の信仰と係る行事の場としても、利用されている(写真 3-28)。

i. 大門地区

下宮礎石建物の南西約100mの位置にあり、平成21年度の発掘調査により平安時代の仏殿と考えられる礎石建物(堂舎)が発見され、その価値が古代後期の宝満山での信仰を示す証拠の一つとして認められ史跡指定された。少なくとも近代以降は耕作地であり、ここは個人所有であり、指定後も耕地などとして管理、利用されている(写真3-29)。

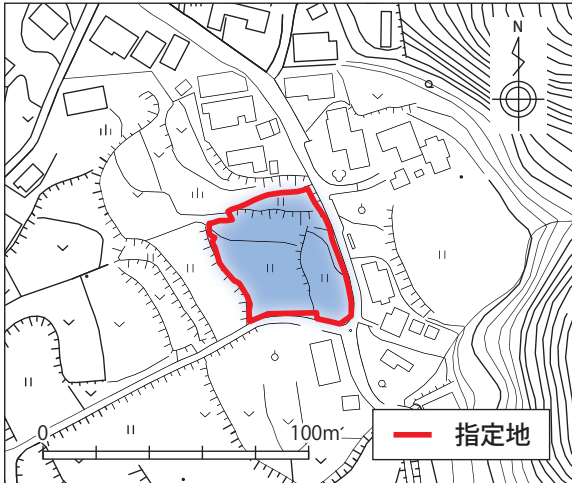


図3-19 大門地区位置図



図3-20 礎石建物イメージ図

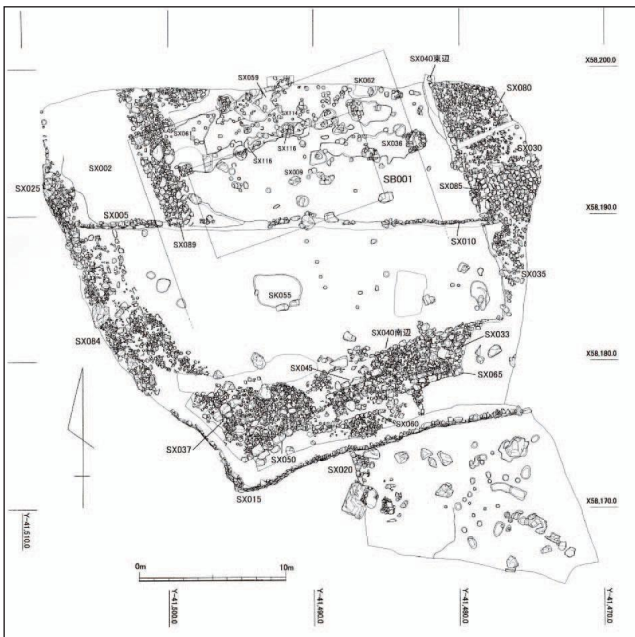


図3-21 礎石建物遺構図(宝満42次調査)



写真3-29 大門地区現況